

## 資料紹介

## 続 経済学者の追悼文集（二）

杉 原 四 郎

## は し が き

本稿は本誌第43巻第5号に掲載した「続経済学者の追悼文集」の続稿である。

本稿では8人の経済学者の追悼文集9冊の他に、雑誌に載った4人の追悼文集を紹介した。私は当初は単行本のかたちで出版された追悼文集のみに限定し、雑誌での追悼文集は脚注で紹介するにとどめていたが、この仕事をつづけてゆくうちに、重要な経済学者の追悼文集が雑誌の特輯号のかたちでのみ出ている場合のあること、単行本で出ている時でも、それとは別に雑誌でも出ている、それが内容的に重要なこと（単行本の追悼文集の内容を補う場合のあること）に気づいたので、それらの雑誌をも紹介することにした。この号で紹介した4点もその例である。ただし今後も雑誌の追悼文（たとえ1人だけでなく複数の文章が同時にのっている場合でも）をすべてとりあげることはせず、単行本を主とし、雑誌は選択的に紹介するという方針でのぞみたい。

## I

## (1) 上田貞次郎 (1879~1940)

『上田貞次郎先生の想い出』、上田会編、発行責任者青葉翰於、1983年5月8日刊行、A5版347ページ、非売品、巻頭に遺影など写真15葉。

本書の編集世話人（青葉翰於、小田橋貞寿、上田正一、松尾弘、木下昂）の「刊行のことば」によれば、1982年5月の上田会で本書刊行のことがきまり、その後1年にして同会員多数の協力で完成した。巻末の「編集あとがき」（上田・松尾）には具体的な刊行経過がしるされ、毎年5月8日の命日に40名前後の参会者（上田の門下生は約400名）が出席する上田会を「およそ現代離れた共同体」とのべている。構成は下の通り。

(一)「上田貞次郎先生の人となりと学問」、一つの評伝、山中篤太郎；ゼミナール小史編集委員会。(二)「門下生の想い出」I 明治大正編 東京高商専攻部時代（井上潔はじめ11

名)、東京商大時代(猪谷善一はじめ8名)。三「門下生の想い出」Ⅱ昭和編(正田英三郎はじめ43名)。四「学界人の想い出」(高瀬莊五郎はじめ17名)。五「家族・親族の想い出」(上田正一はじめ5名)。六「座談会」(出席者、猪谷善一、山中篤太郎、小田橋貞寿、松尾弘、上田正一ら14名、1975.3.7、如水会館で)、最後に著作目録と略歴と上田貞次郎に関する追悼文・論文のリストがある。リストによると、『一橋新聞』、『如水会々報』、『一橋論叢』、『自由通商』などに35人の文章が発表されていることがわかる。

『一橋論叢』は1941年1月(第7巻第1号)を故上田学長追悼号とし、巻頭に胸像と遺稿の写真をかけ、上田の「徳川時代の人口と明治時代の人口」、小田橋貞寿の学界展望「上田先生と日本人口問題」、瀧谷善一の書評「上田博士編著『日本小工業編』」、赤松要の「上田先生と商大東亜経済研究所」をおさめる。

『自由通商』の第13巻第7号(1940年7月)は、上田博士追悼号として60ページのスペースの中に16人の文章がおさめられている。

上田貞次郎君の追憶 志立鉄次郎

上田貞次郎先生の学績 山中篤太郎

米國通商政策の検討 今村篤治郎

貿易体制の転換とリンク制度 川勝傳

日本通商政策の進路 新田直蔵

上田博士を偲ぶの記 平生夙三郎、南郷三郎、瀧谷善一、井上貞蔵、金子鷹之助、増地庸治郎、金田近二、濱野恭平、小田橋貞寿、平尾彌五郎、正木茂の11名。

自由通商運動と上田との関係については、志立鉄之郎、平戸生夙三郎も書き、小田橋貞樹も、これに関する上田の1928年7月21日の日記を紹介しているが、自由通商協会の大阪事務局の正木茂はつぎのようにのべている。

「昭和三年聯盟成立以来、役員中では東に上田博士、西に瀧谷博士、共に学究的のリーダーとして全会員の畏敬的であった。〔上田博士が〕常に言われた言葉に「まだ自由通商というほんとの意義が世間一般に徹底していないと見えて、英国のミル、コブデン、ブライトの学説をそのまま我々が輸入して居る様に思って居られるからいけない。我が国の自由通商は全然英国流には行かない。幼稚産業を保護するのを主張する場合、リストの説にも敬意を表して居るので、原料を安く入れる場合何んでも関税率を低めると考えられては困る。国際分業を力説し延いては人口問題に及ぼすのも結果は人類の平和、生活の安定を目標〔と〕するのであって、今日に於ては『自由通商』は日本から各国に叫ぶ時代になって来て居る」。

本書の中では、山中篤太郎「上田貞次郎先生——一つの評伝——」（これは『一橋論叢』1965年2月号にのったものの転載）が上田の人物と学問を全体としてのべたもので充実している。座談会の内容も上田の人物・学問を知る上に参考になることが多い。「学界人の思い出」の中では、越村信三郎が、大塚金之助のゼミ生になった彼が、学友とともに1933年1月に検挙された大塚の救援方を商大の教授にたのみに歩いたとき、上田が応接室に招き入れ、彼らの意見に耳を傾けた「あの時の先生の温顔が、あざやかに、まぶたに浮んでくる」（265ページ）とのべていることが私の目にとまった。

### (2) 岡橋保 (1905～1993)

『岡橋保先生をおもう』、発行1993年7月27日、編集深町郁彌、制作九州大学出版会、A5版46ページ、非売品、巻頭に遺影7葉。

巻頭に故人の略歴と業績リストがあり、巻末に深町の「あとがき」がある。1993年5月17日に故人が歿し、6月6日に東京学士会館で偲ぶ会が持たれた。その時の模様をテープにとったものを整理し、欠席者3名の原稿を加えてこの小冊子ができたと深町が書いている。

三宅義夫は、「昔の写真を眺めながら」で、1953年の金融学会で故人とはじめて会い、麓健一やその時はじめて会った飯田繁や高木暢哉らと一緒に信用理論研究会編『講座・信用理論体系』（日本評論社）を出したことや、その後の信用理論研究会の歩みをのべている。稲生晴「師よいざこへ行きたまう」と伊丹正博「岡橋保先生を偲んで」は、ともに九大時代ゼミで接した岡橋の思い出を語っている。

「岡橋先生を偲ぶ会」には小野朝男、松井安信、岩熊三郎、村岡俊三、松岡達、山田喜志夫、深町郁彌、高橋久彌、岡本恵也、川波洋一の10名が出席して、岡橋の17冊の業績のリストをみながら、恩師の思い出を語り合っている。岡橋ゼミでどんなテキストが使われ、どんな議論がたたわされたかということを中心に、岡橋の貨幣・金融論の成長過程や問題点が論じられている。私には、岡橋が学位論文となった『信用貨幣の基礎理論』（1949年）を書いた時京大の中谷実の預金通貨論を強く意識していたというくだり（32ページ）——岡橋は九大卒業後京大の大学院に進んだ——や、「やっぱり、あの、飯田（繁）さんとか川合（一郎）さんのね、考え方とか、それから、あの、価格の標準では三宅（義夫）さんとか……が岡橋さんの一方におってもらわんと……。論敵の鏡で、いわば理論的身づくろいをなさって……」という一節（36ページ）が、とくに印象にのこった。

### (3) 小野義彦 (1914～1990)

『追悼小野義彦とその時代——資本主義論争と反戦平和の経済学者——』、発行1992年

11月19日、発行所知人社(大阪市中央区内本町1-1-5)、編者小野義彦追悼集編集委員会、定価4,800円、A5版、viii+418ページ、巻頭に遺影など写真20葉。

巻頭に本書の「刊行に当って」(編集委員会の大賀正行、川島哲郎、崎山耕作、奈良本辰也、原全五、山崎春成、吉村勵)があり、「氏の急逝以来早や2年近い月日が経ちました。この間、氏の業績を偲ぶ事業を求める声が各所から出ていましたが、この度、その一環として追悼集を刊行する運びとなりました。氏との出会いを互いに語り合いその生きざまを幾分なりとも再現すること、また、氏の理論活動について一定の評価を与えることは、今大きく変わりつつある世界と日本のあり様をそれに至る過程も含めて、改めて問い直すことになると考える所存です」とある。また巻末の「編集後記」(編集事務局生駒敏、安喜博彦)には、「できれば故人の一周忌を期して刊行す」るつもりであったが、種々の事情——たとえば「ソ連の8月革命と共産党の解散という事態が起こり、さらにそれはソ連邦の崩壊にまで立ち至り、多くの執筆者の筆が進まない状態が続く」という事情——のため原稿締切をのばさせるをえなかつた、とある。

本書は冒頭に大迫輝通(岐阜経済大学長)と崎山耕作(大阪市大学長)との弔辞と吉村勵の「小野さんの歩んだ道」があり、第1部「クォ・ヴァディス——何処へ——」、第2部「小野義彦とその時代」(これが本書の主な部分で友人や教え子や家族の追悼文が集められている)、第3部「資料編——遺稿・年譜・著作目録等——」の3部構成である。遺稿には、軍隊時代や宮城刑務所解放前後の手記や論文「官僚の独自性について」(未発表)など貴重なものがある。また第1部は小野と岩崎義との対談「ペレストロイカが提起したもの」と「ペレストロイカを越えて——新たなる展望——」(パウズネル「小野義彦教授に捧げる」、ブラギンスキー「科学への復帰——小野教授の思い出——」、両者の共著『経済学——論争上の諸問題と再生への道——』の第三章「市場・価格・利潤」の全訳)がおさめられている。これらのうち小野・岩崎の対談は、編集部(『知識と労働』)からの質問をふくめて、誠に興味深い。なおこの対談については生駒敏「『知識と労働』へのこだわり」(225~227ページ)参照。

第二部は(1)子供の頃——あどけなき「大将」——、(2)人民戦線と維新研究——京大ケルンの光芒——、(3)戦争と牢獄——死地に在りて——、(4)再建への苦闘——解放の予感、(5)論争と飛躍——知識と労働の結合を目指して——、(6)やすらぎの時——野尻湖の山並み——、(7)岐阜での晩年——病魔との闘い——、(8)師を偲んで——追悼の中に——、(9)遺された者からの、9節にわかれ、それぞれの節に関係の深い追悼文がおさめられている。(9)には長男瞭氏とみどり夫人の文章が入っている。

これらの追悼文でとくに印象にのこるのは、増山大助「ひとつのこと」や、宝木武則「小野義彦学兄を偲ぶ」のような日本の人民戦線運動に関する貴重な証言とともに、井汲卓一「小野さんの思い出」、伊藤武「小野義彦さんのこと」、田畑稔「『知識と労働』編集のころ」などのように、故人に対する高い評価と同時に意見のちがいを率直にのべている文章であった。『小野義彦とその時代』と題する本書が単に一個人の追悼文集である以上の意味をもつのは、この種の文章が多くふくまれているからであろう。

『やまなみ——小野義彦先生追悼集——』、1991年8月10日発行。編集・発行「やまなみ」編集委員会、非売品 B 6版95ページ、巻頭ならびに本文の随所に故人の遺影などの写真多数。

『やまなみ』編集委員会の「発刊にあたって」は、「この文集のタイトル『やまなみ』にもあらわれているように、どちらかという、小野先生と身近で私的なお付き合いをさせてもらっていた『小野ゼミOB生』や『日本経済研究会』等のメンバーが……自然発生的に呼びかけた……この文集は、先生がお元気な頃、野尻高原にある別荘にお邪魔した時、狭いセクトで離合集散をくりかえす社会運動をみて、この野尻の『やまなみ』のようなゆったりとした連帯ができないものだろうか」と話題になったことを源にしています」と書いている。そして「大きな社会運動をなしとげるには共通の土台での連帯が何よりも重要なことを心底念じておられた……先生のお気持ち」をこの文集が反映し、われわれがそれを引き継いでゆくことを表明したものだと考えたいとのべている。植西敬、片桐薫、長岡秀恭、安喜博彦、小野瞭ら29人の文章と最後に故人の略歴・業績一覧がおさめられている。なお本書から何篇かの文章が『小野義彦とその時代』に転載されている。

## II

### (4) 中山伊知郎 (1898~1980)

『中山伊知郎先生と労働委員会』、発行1981年3月20日、編集兼発行者中央労働委員会、発行所中央労働委員会、定価2,000円、A 5版333ページ、巻頭に遺影など21葉。題字平田富太郎。

平田富太郎(中労委会長)の序文によれば、中山は中労委の創設当初から公益委員となり、三宅正太郎、末弘嚴太郎のあとをうけて3代目の会長となったが、1950年から10年余その職にあった。戦後窮乏と混乱の昭和20年代から30年代半ば頃まで、多くの大争議を処理し、さらに30年代は王子製紙や三井三池の大争議の解決にあたって労使間のルールや慣行の形成に尽力し、「日本の労使関係において一つの時代を劃した人であった」。また巻末

の「あとがき」（編集委員会代表増田雅一）によれば、中央労働委員会事務局が監修して『中央労働事報』第651号に「中山伊知郎先生を偲んで」という特集を組んだが、それだけでは中山の足跡を留めるには不十分と感じて、平田会長の許可を得て、故人の中央労働委員会を舞台とする活動に限定するという方針で編集することにした。それによって中央労働委員会史上における故人の足跡と先生の御活躍を軸とする戦後労働運動史の一齣とか……何とか描き出された。

最初に矢加部勝美「中労委における中山時代——戦後史的に見た人物評伝——」がおかれ、諸家の追悼文が石田博英以下50音順に25篇ならぶ。つぎに元・労農記者（朝日の村上寛治と読売の樋口弘基と時事通信の清水一）によるものと中労委事務局OB（中島徹三ら7名）によるものとの二つの座談会があり、末弘流と中山流、末弘時代から中山時代へ、末弘先生の「情」と中山先生の「勇氣」、**「中山方式」と「末弘方式」**との相違、などの諸項目でわかるように、末弘嚴太郎の時代と比較して中山伊知郎の活躍ぶりが語られる。以下故人の講演4篇、随筆9篇（いずれも『中央労働時報』にのったもの）、事蹟（故人の取扱った労働争議90余件のうち重要なものの11件の記録）、労働関係の著書目録、年表とつづく。追悼文の中から太田薫の「中山先生とのつきあい」の中から一節を引用しておく。「中山さんは労使協調主義だと世間ではみているようですが、単純な労使協調主義ではない。労使の力関係をきちんとみきわめて判断を下されたので、あの頑固な前田さん（経営者の代表）も、相当戦闘的だといわれた私も、中山さんの案をのんだのだから、多くの調停案ができたんだと思います。……日本の企業組合というカンパニー・ユニオンというか、御用組合というか、戦闘性のない労働組合に対してはプロ・レーバーの立場に立たれました。その中山さんには私なりに感謝しています」。

本書は一方では没後一周年に出た『一路八十年——中山伊知郎先生追想記念論文集——』（杉原『思想家の書誌』83～85ページに紹介）とあわせ、他方では中山の『随想——徹夜の記録——』（1955年）や『労使関係の経済社会学』（1979年）などを参照しつつ読まれるべきものであろう。

##### (5) 堀経夫（1896～1981）

『堀経夫先生追慕』、久保芳和編著、発行者新田満夫、発行所雄松堂出版、発行は1985年2月20日、定価2,000円、B6版、iv+162ページ。巻頭に遺影16葉。

久保芳和は「あとがき」で堀経夫が歿して「早や3年が経過したが、ここにおそまきながらこの追慕記を出版する」としるしている。本書は第1部に年譜と著作目録を、第2部に各界から寄せられた追悼文を、第3部に久保自身による「堀先生追慕」記7篇をおさめ

る。

2部にあつめられた追悼文は下記の通りである。

「堀経夫先生を悼む、久保芳和(神戸新聞)；「式辞」 関西学院大学大学宗教主事小林昭雄；「弔辞」 関西学院大学学長城崎進；「弔辞」 芦屋大学学長福山重一；「弔辞」 経済学史学会代表幹事真実一男；「弔辞」 門下生代表久保芳和；「故堀経夫会員追悼の辞」 学士院会員宮本又次(1981年12月12日、日本学士院総会において)；「堀経夫先生を偲ぶ」 ロバート・オウエン協会会長五島茂(『ロバート・オウエン協会会報』VI)；「貫いた厳しい『原典主義』」 久保芳和(『経済学史学会年報』第20号)；「恩師堀経夫先生を偲ぶ」 久保芳和。

40年以上を堀経夫に師事した久保の11篇の文章(その中ではとくに「堀先生と私」)135～137ページ)と「オウエン協会と堀先生最晩年の手紙」をふくむ諸家の追悼文には、故人の研究者・教育者として、また人間としての諸側面が語られており、特に原典に基づく厳密な実証主義的学風、経済学史学会やロバート・オウエン協会、堀研究会などを通じての学界での活動、古典学派とくにリカードの研究や日本経済思想史やの領域においてのかがやかしい開拓者的業績などが強調されている。1981年10月3日に行われた関西学院大学葬における小林昭雄の式辞は、「先生と経済学」、「先生とキリスト教信仰」、「先生のお人柄」、「内助の功」、「愛唱讃美歌・聖句」の五項にわけ、故人の父堀卓次郎やきみえ夫人のことにふれて、故人の人間像をあきらかにしたものととしてとくに印象にのこった。

#### (6) 堀江邑一(1896～1991)

『堀江邑一先生を偲ぶ』、発行『堀江邑一先生を偲ぶ』刊行委員会(東京都世田谷区経堂1-11-2日本ユーラシア協会内)、1993年12月18日発行、非売品、B6版279ページ、巻頭に遺影など写真16葉。

「刊行にあたって」と「編集後記」を書いている大崎平八郎によれば、故人一年忌に刊行委員会(東郷正延など7人)が発足、大崎平八郎が編集担当者になり、三回忌までに刊行することにしたが、間に合わず故人97歳の誕生日に刊行することになった。編集に際し戦前・戦中・戦後にわたる故人の業績を明らかにすべく著作一覧の作成に努力し、本書にも遺稿の一部の他、戦時中の総合雑誌に発表された論文の要旨を収録した。

第1部「生涯と学問」には、『堀江先生略歴』——戦前の部——をめぐって藤田勇；「経済学者としての堀江先生」大崎平八郎、「戦時中の7編の論文を読んで」上原一慶、の3編がおさめられる。第2部「遺稿」には、「河上肇先生の憶い出」、「松本慎一と尾崎秀実」、「日ソ友好運動の本流としての日ソ協会のあゆみと今後の展望」など8篇が、また第3部「堀江先生を偲ぶ」には、「堀江先生追悼の記」平島仁など22篇の文章がおさめられ

る。経歴が巻頭に、著作一覧が巻末にある。著作一覧は、戦前と戦後に二分され、それぞれ著書、論文、翻訳(戦後はこの他に「座談会、新聞寄稿その他」)に分類される。なお「高松高商時代に『商工経済研究』以外に発表されたものや、高商を辞任し上京した後東洋協会調査部、外務省企画委員会、昭和研究会などに関係していた頃に執筆した論文については不明」という大崎の注記がある。それにしても戦前戦後合わせて著書(編著・共著などをふくむ)13、翻訳22、1924~1975年にかかれた論文多数のこの著作目録によって、故人の広範な研究領域にまたがる業績の全貌がほぼあきらかになった。

堀江が1937~39年に『中央公論』や『改造』などに執筆した時事評論について、大崎は「できればこれらの論文を一冊の本にまとめて刊行し、当時中国問題についてこれだけの勇気ある発言をしていた学者がいたことを多くの国民に紹介したいと思った」とかいている。又上原一慶は「この7篇の論文は、盧溝橋事件、日本軍による上海占領、南京占領・武漢制圧という、日本の侵略拡大の節目節目に、まさに時局とともに書かれたものである。『蒋介石政権は、今度こそは屈服するであろう』という日本側の『期待』に対して、一貫して蔣政権による『長期抗日戦』を予測、主張されており、今日読んでもその見通しに敬服せざるを得ない」という。上原氏はまた堀江論文が「極東の情勢をヨーロッパの情勢との関連でとらえている……いわば世界資本主義的(一国的ではない)分析視角は、今日なお生命力をもっている」とも書いているが、「北支事変の経済的背景」など本書に要約されている7篇の論文を読んで、私もその分析視角に敬服した。

#### (7) 宮本常一(1607~1981)

『宮本常一——同時代の証言——』、1981年5月1日発行、編集宮本常一先生追悼文集編集委員会、発行責任者田村善次郎、発行所日本観光文化研究所(東京都千代田区神田練堀町73、不二ビル)、非売品、A5版583ページ。題字今西錦司、巻頭に遺影など25葉。

巻末の田村善次郎「文集ができるまで——あとがきにかえて——」によると、告別式の翌日(1981年2月3日)に追悼文集を作ろうという話が出て、其後発行日は百カ日にあたる5月9日、発行の主体は日本観光文化研究所、編集委員は田村善次郎はじめ9名とすることがきまった。原稿のグループ分けは田村が、写真は須藤力がえらんだこと、巻末に執筆者(合計258人)索引をつけたことなどが記されている。

本書の構成は巻頭に高松圭太の「定礎」(葬儀委員長)と河原武春(日本常民文化研究所)はじめ10人の弔辞があり、巻末に「葬儀の記」と「叙歎記」がある。本文は、(一)『口承文学』とそのあとさきから(一七)「親と子、妻と夫」までの17項目からなり、それぞれの項目にゆかりのふかい人々の追悼文がおさめられている。そして各項目の最初のペー

ジに、故人の経歴と写真とが挿入される。たとえば(六)『『忘れられた日本人』のあとさき』の最初のページ (p. 186) には、昭和29年から同36年までの略歴——宮本はその間に『瀬戸内海の研究(-)』を書き、これによって文学博士の学位をえる。また『風土記日本』を書き、『日本残酷物語』の編集をはじめ、木下順二と雑誌『民話』(未来社)を創刊するのもこの時期である——と、未来社の人々と一緒にとった写真が挿入され、「雑誌『民話』創刊以後」(西谷能雄)から「愚感」(小箕俊介)まで18人の文章がおさめられている。

未来社社長西谷能雄は、雑誌『民話』が1958年10月に宮本ら6人を編集委員として創刊され1960年9月まで2カ年つづいたが、その間未来社から宮本の著書がつぎつぎに刊行され(『日本民衆史』、『宮本常一著作集』など)、彼のつよいすすめで『菅江眞澄全集』、『早川孝太郎全集』なども出版されるようになったことをのべている。未来社での宮本の著書の刊行は歿後の現在でも継続している(たとえば1993年9月に『生業の歴史』が刊行されたが、これは1965年河出書房新社から出た『生業の推移』をそのまま欠けたままになっていた『日本民衆史』の第六巻として田村善次郎のあとがきを加えて刊行されたものである)。

(四)「京を中心にした知友」では、米山俊直、祖父江孝男、上田正昭、加藤秀俊ら、学界の人々が在野の宮本との交渉や彼の学問について語っている。司馬遼太郎も『『宮本学』と私』で彼が宮本に接することで得た大きなもの、住民の暮らしのしんについての正しい知識のことをのべている。(一四)「映像と芸能を通じて」に書いている人々(姫田忠義や悟道軒円玉や永六輔など)の文章をみると、文学博士で武蔵野美術大学教授(名誉教授)というイメージとは別の宮本、猿まわしや鬼太鼓のような民衆芸能をこよなく愛しその育成に情熱をもやした宮本の姿がうかんでくる。鬼太鼓座の河内敏夫の「宮本先生との出会い」の中に、つぎのような彼の本音のことばがよまれる。「僕の夢は、はっきり言うとな、地域主義なんだよ。それが昔から夢だったんだ。百姓のせがれだったからね。それぞれの地域社会が生き生きしてくることが、世の中で一番おもしろいんで、もういっぺん地方が中央に向かって反乱を起こさなきゃいけないと思うんだ。田舎にそういったエネルギーがあるように思うんで、それが無くなったらね、国っていうのは滅びるんだろう。今はもう完全な中央集権時代。しかしそれをね、もういっぺんぶっこわしてね。人間生きるっていうことはどういうことなんだっていうこと、それを問いつめていく、どうじゃろ、それを君達やって見ないかね。

なあ、やろうや……。 (454ページ)。

## III

## (8) 柴田敬(1902—1986)

『VÉRITÉ』, No. 35, 1987, 山口大学経済学部安部一成ゼミナール発行, B 5版90ページ, 非売品。特集「柴田敬先生を偲ぶ」, 4—13ページ。

編集後記に「柴田敬先生の追悼特集をみて、我がゼミナールの歴史と伝統をひしひしと感じております。御協力いただいた諸先輩方に深く感謝しております」(林智介)とある。特集の冒頭に「去る5月17日に、柴田敬先生が御逝去されました。そこで柴田敬先生の死を悼み、誌上を借りてではありますが、柴田敬先生の御冥福を御祈りしたいと思います」とある。故人の遺影があり、安部一成の「大きな存在としてあり続ける柴田敬先生」、山本英太郎の「柴田先生をしのんで——学生時代の思い出——」および田上隆三(31年卒)、安部雅雄(33年卒)、新田政則(33年卒)の追悼文五篇がならぶ。最後に本誌(『ヴェリテ』)の第5号に掲載された柴田敬「大学のあるべき姿——それは大学で社会科学を学んだ学生の卒業後の生き方をのべて大学教育の理想を語ったものである——」がのっている。本誌はその頃柴田・安部ゼミナールの機関誌であった。

柴田敬は自伝『経済の法則を求めて』(日本経済評論社, 1983年)の「揺籃期の山口大学」の中で、追放解除後の1952年7月に母校山口大学経済学部の教授に就任、母校を日本のローザンヌ大学たらしめたいという夢を抱きつつ学部長として尽力した事情をのべているが、安部一成は柴田が1961年青山学院大学に転勤したあとそのゼミを引継いだ。この『ヴェリテ』は、柴田の自伝および柴田の追悼文集『大道を行く』(日本経済評論社制作, 非売品, 1987年——杉原『思想家の書誌』128—130ページ参照)——を補うものとして、読まれるべきであろう。

## (9) 福田徳三(1874—1930)

『如水会々報』, 第79号・第80号。1930年6月, 7月。福田徳三君追悼録(一), 第79号1—30ページ, 同(二), 第80号, 50—64ページ。発行社団法人如水会。

『福田徳三先生の追憶』(1960年)のことはかつて紹介した(杉原『思想家の書誌』, 23—24ページ参照)が、逝去直後に『如水会々報』が特輯したこの追悼録には、22人の文章がおさめられていて(そのうちの菅礼之助, 小林益太郎, 中谷芳邦, 井藤半彌, 中山伊知郎をのぞく17人は上掲の単行本には書いていない)、福田に関する貴重な文献である。

追悼録(一)には、如水会の弔辞、遺影、告別式風景、告別式次第、葬儀の辞(井深梶之

助), 弔辞(佐野善作学長, 友人総代高野岩三郎, 門下生代表坂西由蔵, 学生代表相原光雄), 追悼文集(関一, 大山卯次郎, 上田貞次郎, 藤本幸太郎, 宮田喜代蔵ら14名)が, 同(二)には続追悼録(松葉谷良太郎, 上田辰之助, 大塚金之助, 井藤半彌, 中山伊知郎ら8名の文章)がおさめられている。

上田辰之助は「聖トマス研究」の中で, 30歳そこそこの福田がトマス・ダキノの経済学説という問題に如何にして着眼したかについて, また福田がこの論文でウズラ論や公正価格論のみとりあげ, 生存権や極窮権(福田の造語)には言及していないことなどを問題にし, つぎのように結んでいる。『義は人を高くす』といふが, 学は先生を深くし, 真実ならしめた。聖トマスに於て, 経済学を見出した所の30才の歳若き学者は, 50幾才にして, 経済学のうちに, アリストテレースを知り, 聖トマスを学んだ。而して, それを通じて, 更により大なる或るものを把握しようとした。それは人間経済の原理其者だ。晩年の先生の御心を支配した最も大きな事はそれに外ならない。

大塚金之助は「世界的規模」の中で, 福田が60の手習いでロシア語の勉強を「猛烈な勢で始められた」こと, 「その頃私は博士が『資本論』ロシア版をこつこつ読んでをられたのを見た」ことを書いている。中山伊知郎は「先生の手紙一つ」の中で, 1927年秋にかいた福田からの留学先の中山あて書簡に, 「此夏一夏をロシア語の稽古に費しました。……コンナ面白いものは私にはありません」とあるのを紹介している。

#### (10) 山田盛太郎(1897—1980)

『専修大学社会科学研究所月報』, 故山田盛太郎先生追悼号, 第212号, 1981年4月20日。A4号, 30ページ, 発行者三輪芳郎, 専修大学社会科学研究所, 製作時潮社, 非売品。

平川東亜の編集後記によれば, この追悼号の企画・編集にあたった小沼堅司が作業半ばに留学したので, その後は大友福夫, 二瓶敏, 鍋島力也の協力をえて完成することができた。巻末に鍋島による「略歴」と「主要著作」がある。

16人の専修大学関係者の文章がおさめられているが, 相馬勝夫総長の感謝の辞と大友福夫の「山田先生と社会科学研究所」(1981年1月15日の葬儀における弔辞)の他は, タイトルが示すように, いずれも個人的な思い出を中心とした, 具体的な叙述が多く, 故人が専修大学の専任教授となった1957年から1967年に定年退職するまでの10年間の山田の活動がしのばれている。山田には単行本になった追悼文集がないだけに, 研究者としても多産的であった晩年の山田の活動をつたえるものとして, この『月報』は貴重である。ちなみにこの『月報』には, No. 114(1973)の「故森川喜美雄所員追悼号」(内田義彦, 細見

英、望月清司ら執筆)；No. 151 (1976)の「小林良正追悼号」(平野義太郎、宇佐美誠次郎、望月清司ら執筆)；No. 333 (1991)の「内田義彦が遺したもの」(吉沢芳樹、長幸男、小沼堅司ら執筆)などの注目すべき号がある。

14人の追悼文はつぎの通りである。「山田先生と私」,平館利雄；「追悼」,小林義雄；「山田先生の一面」,古島敏雄；「思い出すこと」,内田義彦；「一つの発見」,石渡貞雄；「感想二題」,福島新吾；「山田先生と算盤——或る日のプロフィール——」,長幸男；「ひとつの回想」,二瓶敏；「山田先生を偲びて」,加藤幸三郎；「感銘深い山田先生の講義」,栗木安延；「山田盛太郎先生の思い出」,加藤佑治；『再生産過程表式分析』序論50年を目前にして,鍋島力也；「山田先生の思い出」,坂牧三郎；「一受講生の思い出」,泉武夫；以上。なおここには執筆していない吉沢芳樹は No. 43 (1967)に「山田盛太郎所長の御退職にあたって——専修大学における山田先生<回顧>」を,また『経友』(東京大学経友会)の第91号(1981年9月)に「山田盛太郎先生の追憶——一門下生として——」を書いている。

追記 前稿「続経済学者の追悼文集」(第43巻第5号)の中に重要な誤植があったので訂正しておく。(3)下村治(35—37ページ)のところ,治という故人の名前が,すべて誤って浩と印刷されてしまった。(3)の中の下村浩は,すべて下村治の誤植であった。おわびして訂正する次第である。誤りを御指摘下さった熊谷尚夫先生に深謝する。